

## 〈看護学科〉

### 基礎看護学

教授：田中 幸子	基礎看護学
教授：佐藤 紀子	基礎看護学
教授：谷津 裕子	基礎看護学
講師：羽入千悦子	基礎看護学
講師：佐竹 澄子	基礎看護学
講師：青木 紀子	基礎看護学

#### 教育・研究概要

##### I. 教育

1. 基礎看護学領域では看護学生として初めて行う臨床実習である「基礎看護学実習」において、看護職のシャドーイングと多職種連携教育の一環として、医師、薬剤師、検査技師等の医療専門職者のシャドーイングを昨年度に引き続き行った。

2. 「生活過程援助実習」では初めて受け持ち患者を持ち看護実践を行っている。受け持ち患者と初めはコミュニケーションをうまく図れず援助もうまく行えないが、実習の後半には信頼関係を築き患者のニーズをしっかりと把握して看護援助できるようになり、今後の学習において大変重要な実習となっている。

##### II. 研究

1. 看護職者の健康的な働き方を分析することを目的に病院で就労する看護職者を対象に、「看護職者の Healthy Work Environment 特性分析」研究を行っている。また、看護の歴史の継承を促進するためのオーラルヒストリー研究の実態調査を行っており、その研究成果は、日本看護歴史学会で発表した。

2. 看護援助技術については、フィジカルアセスメント技術におけるシミュレーション教育の方法、生体反応から捉える準実験的デザインの研究として、床上排泄に適した体位の検討や安楽を促す音刺激の検討を行っている。

3. 看護学生の国際的視野の育成にむけて、看護系大学における国際看護に関連した科目の現状と課題についての研究を行っている。研究成果は、TNMC & WANDS International Nursing Conference 2017 (Bangkok) で発表した。また、国際看護に関する研究動向に関する統合的文献レビューにも取り組んでいる。

#### 「点検・評価」

##### 1. 教育

1) 2017年度カリキュラムから名称を「基礎看護学実習」と改め、昨年同様の内容で継続して実施している。他の医療専門職へのシャドーイング実習は、昨年度と同様に看護実践への学びに加え、他の医療専門職者の役割と活動を知ることで、より自らの看護職への意識が高まるとともに、多職種連携の視点を持つことにつながっていたと考えられる。

2) 看護実践能力の育成に向けて精力的に教育方法の検討を行った。特に、フィジカルアセスメント教育については研究結果からも一定程度の効果が確認できている。今後、臨床実習での実践を見据え、確実な技術習得だけでなく、臨床状況に応じた技術の実践ができるようシミュレーション教育を取り入れて教授方法をさらに検討していきたい。また、日常生活の援助に関連した技術の習得にむけて、リアリティのある教授方法の工夫やe-ラーニングを用いた学習支援などを工夫していきたい。

##### 2. 研究

研究活動については、領域構成員がそれぞれに研究テーマをもって継続して研究を行っている。

#### 研究業績

##### I. 原著論文

- 1) 小野さやか, 田中幸子, 香取洋子 (北里大), 酒井一博 (大原記念労働科学研究所). 看護系大学教員における職業性ストレスの実態－職位, 大学院就学状況別の比較から－. 看護経済・政策研究学会誌 2018; 1(1): 12-20.
- 2) 宮子あずさ, 菊池麻由美, 佐藤紀子. 効果的な臨床看護研究指導の探求 文献の活用を中心に. 東京女医大看会誌 2018; 13(1): 54-60.
- 3) Aoki N. Sense of learning achievement for excretion assistance techniques through on-campus training and on-site clinical training for nursing students. Nursing & Primary Care 2018; 2(5): 1-7.

##### II. 総説

- 1) 糸賀大地, 佐藤紀子. 看護師の医療事故へのおもいに関する研究の現状と課題 医療安全の歴史の変遷を踏まえて. 東京女医大看会誌 2018; 13(1): 28-33.
- 2) 戸塚絵巳, 佐藤紀子. 中堅看護師の現状とジェネラ

リスナー育成の可能性. 東京女医大看会誌 2018; 13(1): 42-7.

- 3) 花田友理, 佐藤紀子. 周産期母子医療センターに勤務する助産師の仕事の現状と可能性. 東京女医大看会誌 2018; 13(1): 48-53.
- 4) 羽入千悦子. 看護における臨床判断力の教育方法に関する国内外の文献レビュー. 武蔵野大看研紀 2019; 13: 41-8.
- 5) 大久保暢子<sup>1)</sup>, 軽部奈弥子<sup>1)</sup>, 小林由紀恵(新潟大), 佐竹澄子, 武田希帆子<sup>1)</sup>, 酒井宏実<sup>2)</sup>, 杉山理恵<sup>1)</sup>(<sup>1</sup> 聖路加国際大), 百田武司(日本赤十字広島看護大), 丸山理恵(聖路加国際病院). 失語症発症で戸惑う急性期患者の気持ちの様相 国内外の文献検討の結果から. 日ニューロサイエンス看会誌 2018; 4(2): 57-65.

### III. 学会発表

- 1) 小野 桂(神奈川県立図書館), 川原由佳里(日本赤十字看護大), 川上裕子(亀田医療大), 田中幸子. 看護史分野におけるオーラルヒストリーを活用した研究文献の状況. 第32回日本看護歴史学会学術集会. 呉, 8月. [第32回日本看護歴史学会学術集会抄録集 2018; 104-5]
- 2) 若林留美, 山口紀子, 原三紀子, 池田真理, 山内典子, 安田妙子, 原 美鈴, 内田朋子, 小泉雅子, 工藤順子, 河合麻衣子, 三好麻実子, 佐藤紀子. 「熟達者の実践と新人の豊かな感性から学びあう」教育体制における熟達した看護職員の学び. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月.
- 3) 安田妙子, 小泉雅子, 工藤順子, 河合麻衣子, 池田真理, 若林留美, 山内典子, 内田朋子, 原 美鈴, 山口紀子, 原三紀子, 三好麻実子, 佐藤紀子. 「熟達者の実践と新人の豊かな感性から学びあう」教育体制における新人看護師の学び. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月.
- 4) 山内典子, 池田真理, 原 美鈴, 若林留美, 安田妙子, 内田朋子, 小泉雅子, 山口紀子, 工藤順子, 原三紀子, 河合麻衣子, 三好麻実子, 佐藤紀子. 「熟達者の実践と新人の豊かな感性から学びあう」教育体制における看護管理者の学び. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月.
- 5) 三好麻実子, 佐藤紀子, 内田朋子, 河合麻衣子, 工藤順子, 小泉雅子, 原三紀子, 原 美鈴, 安田妙子, 山内典子, 山口紀子, 若林留美, 池田真理. 「熟達者の実践と新人の豊かな感性から学びあう」教育体制の開発に向けた検討. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月.
- 6) 今村仁美, 佐藤紀子. 臨床看護師にとっての看護基礎教育での教員経験の意味. 日本看護学教育学会第

28回学術集会. 横浜, 8月.

- 7) 糸賀大地, 佐藤紀子. キャリア基盤形成期にある看護師にとってのインシデント. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月.
- 8) 戸塚絵巳, 佐藤紀子. 急性期病院に勤務する30代看護師の仕事への「思い」の様相. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月.
- 9) 宮本加奈子, 佐藤紀子. 病棟に勤務する認定看護師の同僚看護師とともに行う看護実践. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月.
- 10) 花田友理, 佐藤紀子. 周産期母子医療センターに勤務する30歳前後の助産師の経験. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月.
- 11) 佐藤紀子. (基調講演) フォレンジック看護を創造する. 日本フォレンジック看護学会第5回学術集会. 新潟, 9月.
- 12) 佐藤紀子. (講演2) 看護職生涯発達学から見た看護基礎教育. 第30回日本看護学会協議会学会. 鹿児島, 8月.
- 13) 佐藤紀子. (教育講演I) 救急看護における看護師の臨床の『知』. 第20回日本救急看護学会学術集会. 和歌山, 10月.
- 14) 羽入千悦子. 臨床判断力の教育方法に関する文献レビュー. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月. [日看科学会講集 2018; 38回: P2-11-14]
- 15) 青木紀子. 排尿や排便に適した排泄姿勢に関する文献レビュー. 日本看護技術学会第17回学術集会. 青森, 9月.
- 16) Aoki N. Investigation of the optimal defecation posture in beds for providing adequate intra-abdominal pressure. 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS2019). Singapore, Jan.
- 17) Takasuka A, Tanaka S. Present status of international nursing education including liberal arts in Japan. 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS2019). Singapore, Jan.
- 18) 窪田 静(愛媛県立医療技術大), 大宮裕子(西部文理大), 大久保暢子(聖路加国際大), 佐竹澄子, 小林由美<sup>1)</sup>, 佐々木杏子<sup>1)</sup>(<sup>1</sup> 神奈川県立保健医療大). (交流セッション4) 摩擦軽減用具を用いたポジショニングケア 「看護運動学」の萌芽へ. 日本看護技術学会第17回学術集会. 青森, 9月.

### IV. 著 書

- 1) 佐藤紀子. 第9章: 看護キャリア開発 新人看護師教育ープリセプター制度. 小池智子(慶應義塾大), 松浦正子(神戸大), 中西睦子(元国際医療福祉大)編. 看護サービス管理. 第5版. 東京: 医学書院, 2018. p.224-9.

- 2) 中木高夫 (元天理医療大), 谷津裕子. 第1章: 質的看護研究の基礎としての「体験」の意味—ディルタイ解釈学の伝統を継ぐドイツ語圏の哲学者の文献検討とその英語・日本語訳の比較から—. 中木高夫, 谷津裕子, 永田 明 (長崎大). 質的看護研究の基礎づけ. 東京: 看護の科学社, 2018. p.1-25.
- 3) 中木高夫 (元天理医療大), 谷津裕子, 神谷 桂. 付録: 看護学研究論文における「体験」「経験」「生活」の概念分析. 中木高夫, 谷津裕子, 永田 明 (長崎大). 質的看護研究の基礎づけ. 東京: 看護の科学社, 2018. p.92-120.

## V. その他

- 1) 田中幸子. 東京慈恵会医科大学 大学院看護学専攻の歩み. 生命と倫理 2019; 6: 59-66.

## 成人看護学

教授: 中村 美鈴	クリティカルケア看護学, 周手術期看護学, 救急看護学
教授: 佐藤 正美	がん看護学, 緩和ケア
教授: 永野みどり	創傷ケア, 看護サービスマネジメント
准教授: 望月 留加	がん看護学, 緩和ケア, 家族看護
准教授: 福田美和子	クリティカルケア看護学, 急性期看護学, 周手術期看護学
講師: 室岡 陽子	周手術期看護学, リハビリテーション看護学, 創傷ケア
講師: 大坂和可子	周手術期看護学, がん看護学, 看護情報学
講師: 明神 哲也	クリティカルケア看護学, 急性期看護学

## 教育・研究概要

学部教育としては、概論および健康レベルに応じた臨床看護学の慢性期・周手術期・がん・急性期の領域について学内で教授し、慢性期および周手術期看護学実習では病院での看護実践での臨地実習をとおして、習得するプロセスを重視した教育を実践した。研究においては、がん看護学分野および急性・重症患者看護学分野において、各自の専門性に依拠した継続したテーマを追究した。

## I. 教育

成人看護学においては、対象理解に基づいた問題解決的思考を育成するために看護過程の展開を重視した教育を展開している。成人看護学の教員全員で担当する「成人看護実践論」「看護過程Ⅱ」では、シラバスに対応した内容を科目の主担当者を中心に、新たな事例等を作成して学生のグループワークを主とした演習を実施した。授業方法は、従来通りグループ学習を基盤としたPBLの方法を継続した。学修評価のグループメンバーの貢献度についてピア評価も引き続き実施した。学生による授業評価は概ね肯定的であったが、一部の学生から、正解や達成感を望む意見があった。

実習指導においては、年度に引き続き、急性期・慢性期の担当を偏らずに指導する体制で実習に取り組んだ。本年度のように新しい教員が3人入り、年度途中で1人が退職するような教員のオリエンテーションや担当の変更等があるような状況でも、対応することができたのは、この急性・慢性横断の実習指導体制も一要因になったと考えられる。また臨地においては、実習指導教員と臨床実習指導者との振り返りをして、引き続き連携を深めた。看護実践能力を獲得するためには、実習経験を学生自身が意味づけ、主体的に学習することが重要である。学生は、教員が臨床の場に居て適宜振り返りをする、記録を基に看護過程展開に対するヒントを出す、ともに実践する、安全を確保する、などの教育的介入に対して概ね肯定的に評価をしていた。これらは継続したい点であり、今後も関係者と役割分担を調整し、適切な相互作用をしながらの実習指導が期待される。

## II. 研究

### 1. クリティカルケア看護に関する研究

#### 1) 急性・重症患者の回復を促す看護実践モデルに関する研究

クリティカルケアに関与する専門看護師に半構成的面接法にてインタビューを用いて、回復を促す看護実践を見出し、実践モデル案を作成した。このモデルの臨床応用を検証するために、臨床看護師を対象に調査を実施し、データ回収中である。

#### 2) クリティカルケア看護実践力サポートプログラムの開発に関する研究

クリティカルケアが展開される場で勤務する看護師に対し、看護実践力サポートプログラムを構築している。特にシミュレーションとリフレクションの組み合わせが、メタ認知を高めることに寄与することが推察され、その実証に向けたプログラム評価尺

度を開発中である。さらに、現場に应用可能なモデルへ発展させるための要素の抽出も行った。

## 2. 周術期看護に関する研究

1) これまでドレーン排液の色指標は、臨床上、確立されておらず、現状では、その時々に関与する医師・看護師の経験知に基づく判断であり、その判断にはばらつきがある。そこで、未開拓であった血液成分の組成や色分析から、ドレーン排液の色指標の創出までを目的とし、その臨床応用までを目指し、研究を推進している。

## 3. がん患者の看護に関する研究

### 1) 直腸がん前方切除術後患者の排便障害を軽減する看護支援に関する研究

前方切除術後に特徴的な排便障害を軽減する看護方法の開発を進めている。本年度は、結腸がん切除術後患者と直腸がん前方切除術後患者を対象に調査し、「排便障害評価尺度 ver.2」の併存的妥当性および識別の妥当性を確認でき学会で発表した。

2) がん化学療法に伴う末梢神経障害に関する研究  
多施設との共同研究として、がん化学療法に伴う末梢神経障害の支援アプリケーションの評価研究、ならびに多職種協働の包括ケアシステムモデルの開発を進めている。本年度は開発したアプリケーションの評価として無作為化比較試験を行った。また、多職種協働の包括ケアシステムモデルを開発するために、がん化学療法に伴う末梢試験障害を抱える患者へのかかわりや多職種連携の現状について医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士を対象とした質的研究を行った。

### 3) 子育て中のがん患者の支援に関する研究

本研究の目的は、治療を受ける子育て世代のがん患者が抱える気かりに対するアセスメントツール、及びアプリケーションを開発し、評価指標に基づくITを活用した包括的ケアモデルの開発を行うことである。本年度はインターネットを活用した実態調査を行うための研究計画書の作成等を行った。

## 4. その他に関する研究

### 1) ストーマ造設術患者のQOLに関わる生活特性に関する研究

直腸がんによりストーマを造設した患者を対象に、セルフケア習得とストーマ周囲皮膚障害に関連した患者の身体的要因と社会的要因の情報を診療記録から収集し、分析した論文を作成して投稿した。

2) 入院時褥瘡保有患者の生活特性に関する研究  
入院時褥瘡保有患者の生活特性に関する研究の計画書を作成し、学内の倫理委員会で承認を得た。4附属病院の6人の皮膚排泄ケア認定看護師のうち、

各病院から1人ずつ4人と研究分担者がエキスパートパネルを開き、調査項目を洗練した。来年度は、4附属病院の臨床研究実施確認の承諾を得て、本格的にデータ収集を始める予定である。

### 3) 在宅療養者の褥瘡予防のための汎用型血流改善ミニシートの研究開発

回復期病棟に入院し日常的に車いすを使用する患者を対象に、ミニシート使用における接触部体圧と血流の変化についてデータ収集を実施した。収集したデータより、ミニシート使用による組織血流量の増加、接触部体圧の減少を認めた。今後、新規用具の開発につなげられるように分析していく予定である。

### 4) 踵部の圧力およびずれ力の測定とドレッシング材による低減効果の検証

研究の目的は、頭側挙上時の、踵の圧力・ずれ力を測定するとともに、ドレッシング材により圧力・ずれ力が低減されるかを検討した。対象者は30歳以上の健常人とし、臥床した状態から頭側挙上した際の角度毎の踵部の圧力・ずれ力の測定、ならびにフィルム材(A群)、低摩擦ハイドロコロイド材(B群)シリコンフォーム材(C群)の3種類のドレッシング材貼付時の皮膚表面に加わる圧力・ずれ力を3軸触覚センサーにて測定した。今後分析を進めていく予定である。

## 「点検・評価」

教育においては、成人看護学の教員全員で担当する「成人看護実践論」、「看護過程Ⅱ」について話し合いを重ねて進めたが、新メンバーが3人と多いこと、準備時間が短いことなどから、演習等での教員の役割や分担の認識が異なっていたことがあった。次年度は早い時期からの企画検討し、認識の統一が望まれる。引き続き、授業内容の精選および授業方法、評価方法について検討が必要である。実習教育においては、4附属病院との連携や調整はスムーズであり、実習内容・方法は昨年度の評価に基づきさらに発展させることができた。継続して環境調整を行い充実した教育を継続したい。教員体制としては、成人看護学急性期領域の教授2名、講師1名が新規に着任、新しいメンバーとなり成人看護学領域全体で協力して教育や組織運営を実施した。慢性期領域の講師が2018年12月に中途退職することに伴い、領域内全教員で協力して授業および実習指導体制や会計などの事務役割の修正をして予定通りの講義・実習や事務処理ができた。

研究においては、新たに外部資金を獲得した教員もおり、それぞれが積極的に取り組んでいる。今後



も研究内容を教育に還元すべく、学会発表および論文発表に尽力するために、領域内で協力し合う風土を継続させて、学内・学外研究者とも協力し、時間や環境のマネジメントをしながら取り組んでいきたい。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) Nagano M, Ogata Y, Ikeda M, Tsukada K, Tokunaga K, Iida S. Peristomal moisture-associated skin damage and independence in pouching system changes in persons with new fecal ostomie. *J Wound Ostomy Continence Nurs* 2019; 46(2) : 137-42.

### II. 総説

- 1) 大坂和可子, 山内英子. 乳房再建を含む乳癌術式決定における患者中心の意思決定支援とディジションエイド活用の動向. *Oncoplast Breast Surge* 2018 ; 3(3-4) : 51-8.

### III. 学会発表

- 1) Nakamura M, Yoshida N, Matunuma S, Machida M, Moro E, Akashi K, Utsunomiya A, Marutani S. Challenge of developing nursing practice models for the facilitation of critical patients' recovery. 10th ICN NP/APN (International Conference for Nurse Practitioner/Advanced Practice Nursing) Conference. Rotterdam, Aug.
- 2) 中村美鈴, 明神哲也, 阿久津美代, 宇都宮明美, 福田美和子, 室岡陽子. PICS (Post-Intensive Care Syndrome) 予防のための確かな高度看護実践とシームレスな組織創り. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月.
- 3) Komizunai S, Shinji N, Konno A, Kanai S, Asaka T, Nakamura M, Inoue S, Murata E, Mani H, Colley N. Possibility of simultaneous monitoring of motion-eye trajectory with a simulation-based training for endotracheal suctioning: a novel approach. IMSH (International Meeting on Simulation in Healthcare) 2019. San Antonio, Jan.
- 4) Ninomiya S, Konno A, Kanai S, Asaka T, Nakamura M, Inoue S, Komizunai S, Murata E, Mani H, Colley N. Development of sensing load system on the surface of simulated bronchial membrane. IMSH (International Meeting on Simulation in Healthcare) 2019. San Antonio, Jan.
- 5) コリー紀代, 小水内俊介, 近野 敦, 金井 理, 浅賀忠義, 中村美鈴, 井上創造, 村田恵理, 萬井太規,

二宮伸治. 視線移動量を用いた気管内吸引シミュレータの教育評価の検討 (優秀演題賞). 第51回日本小児呼吸器学会. 札幌, 9月.

- 6) 宇都宮明美, 細堂順一, 中村美鈴. 開心術を受ける高齢患者への多職種によるフレイル予防介入への取り組み. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月.
- 7) 佐藤正美. 排便障害によるQOL低下をいかに治療シケアするか “combat or cope with”. 第28回骨盤外科機能温存研究会. 千葉, 6月. [日外科系連会誌 2018 ; 43(5) : 982]
- 8) 佐藤正美. (会長講演) 看護診断の原点にかえろウークライアントの健康な生活に有益な看護介入に向けて-. 第24回日本看護診断学会学術大会. 東京, 7月. [看護診断 2018 ; 23(2) : 36]
- 9) 佐藤正美. (ポスター) 看護師と薬剤師との連携に関する文献研究. 第11回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会. 阿見, 8月. [第11回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会プログラム・抄録集 2018 ; 46]
- 10) 佐藤正美, 務台理恵子, 望月留加. 調剤薬局に訪れるがん患者・家族から薬剤師が受ける相談内容 看護師との連携を目指して. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月. [日看科学会講集 2018 ; 38回 : 416]
- 11) 菊池麻由美, 高島直美, 佐藤正美, 藤村龍子. 看護診断「意思決定葛藤」の診断上の課題. 第24回日本看護診断学会学術大会. 東京, 7月. [看護診断 2018 ; 23(2) : 88]
- 12) 角田真由美, 佐藤正美, 石川幹子, 青木祥子, 栗田美紀, 望月留加, 務台理恵子, 細川舞. (ポスター) 緩和ケアリンクナースをメンバーとした事例検討会での学びの分析. 第33回日本がん看護学会学術集会. 福岡, 2月. [日がん看会誌 2019 ; 33(Suppl.) : 190]
- 13) 務台理恵子, 望月留加, 佐藤正美, 川口利子. (ポスター) 外来化学療法を受けるがん患者が初回治療前に抱える気がかりに関する検討. 福岡, 2月. 第33回日本がん看護学会学術集会. 福岡, 2月. [日がん看会誌 2019 ; 33(Suppl.) : 244]
- 14) 柳 朝子, 新井美智子, 高島淳生, 望月留加, 佐藤正美. (ポスター) EGFR 阻害薬による爪囲炎及び爪囲炎に対するセルフケアの実態～皮膚障害ケアの検討～. 第3回日本がんサポーターティブケア学会学術集会. 福岡, 8月. [日本がんサポーターティブケア学会学術集会プログラム・抄録集 2018 ; 3 : 118]
- 15) 永野みどり. (シンポジウム1 : 麻酔管理下の患者の安全管理) 麻酔管理下の皮膚損傷の予防. 看護薬理学カンファレンス 2018 in 東京. 東京, 10月. [看護薬理学カンファレンス 2018 in 東京抄録集 2018 ; 7]
- 16) 室岡陽子, 武田利明. 可搬型血流改善シートの褥瘡

予防効果の検証. 第20回日本褥瘡学会学術集会, 横浜, 9月. [褥瘡会誌 2018; 20(3): 316]

- 17) Osaka W, Yonekura Y, Arimori N, Aoki Y, Danya H, Fujita M, Hagiwara K, Nakayama K. Development of the Japanese version of the International Patient Decision Aids Instrument (IPDA Si ver. 4.0): translation and linguistic validation. 16th International Conference on Communication in Healthcare (ICCH 2018). Porto, Sept. [16th International Conference on Communication in Healthcare Abstract 2018; 52]
- 18) 大坂和可子, 青木頼子, 江藤亜矢子, 北奈央子, 有森直子, 中山和弘. (ポスター) 意思決定の葛藤尺度短縮版 (SURE test) の日本語版開発 - 言語的妥当性の検討 -. 第38回日本看護科学学会学術集会, 松山, 12月. [日看科学会講集 2018; 38回: 385]

#### IV. 著 書

- 1) 永井英雄 (茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター) 監修, 佐田尚宏 (自治医科大), 中村美鈴編. ドレーン & チューブ管理マニュアル: 特定行為に役立つ, 臨床に活かす. 改訂第2版. 東京: 学研メディカル秀潤社, 2019.
- 2) 佐藤正美. 第1部: 急性期看護概論 3. 急性の状態にある患者と家族に対する看護, 第2部: 周手術期看護 第VI章: 事例で考える周手術期看護 11. 排泄機能の再確立 ①低位前方切除術. 林 直子 (聖路加国際大), 佐藤まゆみ (千葉県立保健医療大) 編. 成人看護学: 急性期看護 I: 概論・周手術期看護. 改訂第3版. 東京: 南江堂, 2019. p.29-31, 344-63.
- 3) 佐藤正美. 第13章: 排泄機能障害のある成人への援助. 林 直子 (聖路加国際大), 佐藤まゆみ (千葉県立保健医療大) 編. 成人看護学. 東京: 放送大学教育振興会, 2018. p.243-64.

#### V. その他

- 1) 佐藤正美. 看護診断は, 臨床でどう役立つ? 教育でどう教える? Expert Nurse 2018; 34(7): 112-5.
- 2) 佐藤正美. 看護診断の原点にかえろう クライエントの健康な生活に有益な看護介入に向けて. 看診断 2019; 24(1): 40-5.
- 3) 福田美和子. 【査読者の視点を学ぶ - 質的研究論文のための査読セミナーから】 査読を経て論文はどう変わるか [模擬査読において得られたことと査読をめぐって考えること・1] 査読者と投稿者の共通言語としての査読ガイドライン. 看研 2018; 51(1): 29-31.
- 4) 室岡陽子. 【知らないといけない! 看護ケアのギモン Part 2】 (Part 3) 感染管理膀胱留置カテーテル挿入中に, 膀胱洗浄は必要? Expert Nurse 2018; 34(9): 108-9.

## 老年看護学

教授: 梶井 文字 老年看護学  
准教授: 中島 淑恵 老年看護学

### 教育・研究概要

#### I. 学部教育

老年看護学の学部教育は, 2012年度の改正カリキュラムによる実習内容が変更に伴い, 超高齢社会ならびに地域包括ケアシステムの構築といった新しい保健・医療・福祉システムの中での高齢者への多様な看護支援の理解できることをねらいとしてきた。さらに2017年度からは, 2015年度からの変更の上に看護学科ディプロマポリシーを意識した新カリキュラム編成に基づく科目構成となり, 地域の医療機関, 高齢者施設, 自宅に在住する高齢者の多様な健康課題をもつ高齢者への看護支援ならびに地域・保健医療福祉に関わる多職種連携を学習するために必要な知識の理解を強化するように以下の各科目内容を構成した。特に新カリキュラム科目編成となった学年は1年次, 2年次である。

##### 1. 老年看護学概論 (新カリキュラム科目)

1年次前期の老年看護学概論では, 加齢に伴う心身の生理的変化および社会環境の変化が高齢者の生活に与える影響, 高齢者看護における人権擁護と倫理問題, 我が国の高齢者政策の現状と課題について考え, 学生が自身の意見や考えを他者に述べる事ができるような教育方法を検討し, また高齢者の疑似体験や実際の大学周辺の地域に在住する高齢者との交流等の演習を通じて, 健康な高齢者の理解を深めるように教授した。

##### 2. 老年看護方法論 I (新カリキュラム科目)

2年次後期の老年看護方法論 I では, 老年期の人々に多くみられる症状 (低栄養, 摂食・嚥下機能の低下, 認知症, せん妄・うつ, 骨・関節疾患, 転倒, 失禁等) を中心とし, その看護アセスメントについて理解し, 高齢者の自立支援・介護予防に向けた看護実践を教授した。

##### 3. 老年看護方法論

3年次前期の老年看護方法論では, 高齢者に特有の健康障害と周手術期・回復期・慢性期における治療とそれに伴う反応を理解し, 症状に適した実践方法や, 高齢者およびその家族を対象とした基本的援助方法について, 急性期およびリハビリテーション期にある脳梗塞の患者の看護過程を展開する演習を通じて教授した。

#### 4. 臨地実習

##### 1) 老年看護学実習 I

3年次後期の老年看護学実習 I では、脳血管疾患や運動器疾患等の障害をもつ1名の高齢患者を受け持ち、術後の急性状況およびリハビリ期における身体・精神・社会面の特性を理解し、退院後の自立支援に向けたリハビリテーションを生かした看護過程を実践し、関連の多職種連携におけるチーム医療、看護職の役割について教授した。

##### 2) 老年看護学実習 II

障害を抱えながら、地域で生活する高齢者とその家族の特性を理解し、地域の保健・医療・福祉サービス機関と連携しながら、高齢者が地域で生活し続けるための継続看護を実践するための能力と態度を養うため、4年次前期に介護老人保健施設、認知症対応共同生活介護、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所での実習を通して地域医療福祉における多職種連携と看護職の役割について教授した。

##### 3) 総合実習（継続看護コース）

4年次後期の継続看護コースでは、慢性疾患等をもちながら在宅で生活する高齢者の受診の背景（要因）や、医療機関の救急外来を含む外来受診時の、心身・社会的な状況、看護の役割や各外来の専門性のある看護実践を理解することを教授した。

## II. 研究

領域内で取り組んでいる研究活動は、以下の4つである。

1. 高齢者の在宅継続転倒予防プログラムと検知・支援モニタリング方法の開発と評価（科学研究費補助金・基盤研究（B）・2018年度）  
転倒検知アプリケーションの装備したスマートフォンを用いた介入研究の対照群の調査を行った。地域の65歳以上の高齢者を対象とした「シニアのための転倒予防講座」を隔週3回実施し、講座の初回時、初回時から3ヶ月後、6ヶ月後の心身の健康状態（BMI、筋肉量、骨密度、握力、開眼片足立ち時間、10M歩行時間、MMSE、GDS等）や保健行動（運動頻度、社会活動）に関するデータを収集した。2018年度の対象者は、5名であった。現在分析中である。

2. 地域在住の認知症者と家族介護者の支援を担う潜在看護職の育成・教育プログラムの開発（科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究・2018年度）

潜在看護職における、地域で生活する認知症の人と家族介護者の看護支援への関心、認知症の人と家

族支援に必要な学習ニーズ、ワークライフバランスを考慮した支援活動に対する希望、今後の活動の場、ならびに収入等の育成に必要な課題についてを明らかにし、報告書を作成した。

3. 第三病院地域連携型認知症疾患医療センター、狛江市、看護学科との連携による研究で「認知症者の家族介護者の困りごと」調査を実施し、家族介護者の居住地域によって、狛江市とそれ以外の地域別の分析を行い、報告書にまとめた。（2018年度高齢社会対策区市町村包括補助事業）

#### 4. 音楽併用リハビリテーションによる臨床音楽による癒し感の生理・心理的定量化手法の開発

脳卒中による中等度麻痺患者が継続的なリハビリテーションに取り組み、身体的な機能回復を促進するためのセルフマネジメントプログラムを確立することを目的として、音楽併用リハビリの効果を検証し、看護支援プログラムを開発している。そのために、情動が運動意図に及ぼす影響について明らかにするため、基礎的検討として、ボタン押し運動における運動準備脳電位（MRCP）に影響を与えた要因を特定した。明確なリズムで、調性やメロディーが心地よい、迫力がある、適切な音量でリハビリに併用する音楽を提示したときに、MRCPの振幅が増大し、運動意図が高まることで随意運動の準備状態を向上させる可能性があることがわかった。この結果に基づき、中等度麻痺患者の情動と運動機能の関係を調査する予定である。（科学研究費補助金・基盤研究（C）・2018年度）

## 「点検・評価」

### 1. 教育

学部教育である老年看護学の関連授業・実習においては、2017年度の評価を踏まえて、さらに授業と実習が連動できるように、学生が老年看護学で必要とする看護技術の学習を深められるよう、また地域包括ケアシステムにおける看護の役割に関する学習を深められるよう、授業内容・演習内容を改善することができた。

### 2. 研究

研究活動については、領域構成員がそれぞれに研究テーマを持ち積極的に研究を遂行している。外部の競争的資金である科学研究費補助金による2研究を昨年度に継続して、外部の分担研究者と共に実施できている。また第三病院認知症疾患医療センター、狛江市との共同研究も実施できた。現在データを分析中のデータも含め、学会発表ならびに論文にて公

開していく必要がある。

## 研究業績

### Ⅲ. 学会発表

- 1) 梶井文子. (シンポジウム: 次世代につなぐ健康・栄養システムとその実践について考える) 今後の健康・栄養ケアに関わる専門職連携教育 (IPE) で重視すべき視点. 第18回日本健康・栄養システム学会大会. 横須賀, 6月.
- 2) 久保善子, 佐竹澄子, 高橋 衣, 梶井文子, 石川純子, 望月留加, 嶋澤順子, 北 素子. (ポスター) 看護系大学生の主体的学修行動の検討. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月. [日看教会講集 2018; 28回: 134]
- 3) 亀澤ますみ, 梶井文子. (ポスター) 看護学生の自己理解・他社理解に関する文献検討. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月. [日看教会講集 2018; 28回: 180]
- 4) 梶井文子, 永澤成人, 草地潤子, 千吉良綾子, 新野直明, 福川康之, 小野口航, 櫻井尚子, 高橋 仁, 吉田啓晃, 小沼宗大. (ポスター) 地域在住高齢者におけるスマートフォンを用いた多因子介入転倒予防プログラム後の変化~24週間の転倒発生, 認識ならびに行動~. 日本転倒予防学会第5回学術集会. 浜松, 10月. [日転倒予会誌 2018; 5(2): 135]
- 5) 梶井文子. (ポスター) 地域在住の認知症者と家族介護者の支援を担う潜在看護職の再教育プログラム開発に必要なニーズ. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月. [日看科学会講集 2018; 38回: 292-3]
- 6) 嶋澤順子, 梶井文子, 細坂泰子, 田中幸子, 内田 満, 北 素子. (交流セッション 21) 東京慈恵会医科大学医学部看護学科におけるディプロマ・ポリシーを真に達成する教育改革への挑戦. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月. [日看教会誌 2018; 28(学術集会講演集): 97]
- 7) 中島淑恵, 美馬達哉, 梶井文子. (ポスター) 音楽を併用した随意運動での運動関連電位に影響を与える情動因子の検討. 第48回日本臨床神経生理学会学術集会. 東京, 11月.
- 8) 中島淑恵, 梶井文子. (口頭) 音楽を併用した随意運動意図に影響を与える情動因子の検討. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月. [日看科学会講集 2018; 38回: 97-8]

### Ⅳ. 著 書

- 1) 梶井文子. 第4章: 高齢者にみられる症状と看護 2. 痛み, 3. 発熱, 8. 浮腫, 9. 皮膚症状 (スキンケア), 10. 低栄養, 第5章: 高齢者のQOLを高

める専門的な看護技術 3. 食事のケア. 島内 節 (人間環境大), 内田陽子 (群馬大) 編. これからの高齢者看護学: 考える力・臨床力が身につく. 京都: ミネルヴァ書房, 2018. p.114-22, 134-46, 167-70.

- 2) 梶井文子. 第1章: 栄養と食事の自立を促すケアとアウトカム評価 1. 食事摂取と栄養バランスのケアとアウトカム評価. 島内 節 (人間環境大) 編著. 現場で使える在宅ケアのアウトカム評価: ケアの質を高めるために. 京都: ミネルヴァ書房, 2018. p.9-16.
- 3) 梶井文子. V. 医療と栄養 3. 栄養アセスメント, VI. 福祉と栄養 2. 栄養ケアマネジメント. 渡邊早苗 (女子栄養大), 寺本房子 (川崎医療福祉大), 松谷美和子 (国際医療福祉大), 土谷昌広 (東北福祉大), 小野若菜子 (聖路加国際大) 編. 健康と医療福祉のための栄養学: 身体のしくみと栄養素の働きを理解する. 東京: 医歯薬出版, 2018. p.101-3, 119-22.
- 4) 梶井文子. 第6章: 老年看護の対象とのかかわり VI. 健康的で尊厳ある暮らしに向けて ①コミュニケーションへの援助, ②自立支援・介護予防への援助, 第7章: 老年期に特有な健康障害と看護 II. 高齢者に特徴的な症状・メカニズムと看護 ④低栄養. 奥野茂代 (長野県看護大), 大西和子 (鈴鹿医療大, 三重大) 監修, 百瀬由美子 (愛知県立大) 編. 老年看護学: 概論と看護の実践. 第6版. 東京: スーヴェルヒロカワ, 2019. p.202-10, 255-62.

### V. その他

- 1) 梶井文子. 【在宅において「食べること」をささえる】在宅療養者の「食べること」を支援する必要性. 日在宅ケア会誌 2018; 22(1): 5.
- 2) 梶井文子. 事業活動報告 No.2 平成29年度分野連携アクティブ・ラーニング対話集の結果報告 Ⅲ. 開催プログラム及び開催結果 6. 栄養学・薬学・医学・歯学・看護学グループ. 大学教育と情報 2018; 2: 57.
- 3) 梶井文子. 潜在・就業看護職における認知症者と家族介護者への支援活動に関するニーズ. 平成27-29年度挑戦的萌芽研究 地域在住の認知症者・家族介護者の支援を担う潜在看護職の育成・教育プログラムの開発報告書 2019; 1-69.
- 4) 梶井文子. 狛江市ならびに周辺地域における「家族介護者の困りごと調査」. 平成30年度高齢社会対策区市町村包括補助事業 「認知症の人と家族を支える医療機関連携介護者支援事業」報告書 2019; 1-135.



## 精神看護学

教授：小谷野康子 精神看護学  
 准教授：山下真裕子 精神看護学  
 講師：石川 純子 精神看護学

### 教育・研究概要

#### I. 教育

精神看護学の授業は、学年進行とともに概論、方法論Ⅰ、方法論Ⅱ、領域実習、総合実習が専門科目として設定されている。概論では、脳と様々な精神機能、心の構造と働き、心の発達理論を紹介しつつ、ライフサイクルにおける精神保健上の問題、地域における精神保健活動、災害とこころ、メンタルヘルスの保持とその方法等、精神保健を中心とした講義を行った。授業後半では精神医療の歴史と人権擁護とともに関連法規について学修した。講義に加え防衛機軸のレポートを課すことにより知識の定着を図った。東日本大震災における被災者のこころの闘いについては、実録視聴覚教材を用いて惨事ストレスのトラウマティックな体験が如何にこころに打撃を与えたかについて学修した。

精神看護学方法論Ⅰでは、精神医学講座の医師が代表的な精神疾患の原因、症状、薬効、副作用を専門家の視点から解説した。その後、看護師の視点、当事者の視点から疾患を抱えた生活を捉え直し具体的な看護問題を考察する授業を行った。また、精神科医療における倫理的課題についてディベートを取り入れて考察する機会を設けた。また、精神保健福祉法を基本法として行われる現在の日本の精神医療・精神看護について、対象者の行動制限のとらえ方、支援の在り方についてクリティカルな視点で考察する能力を育てることをめざした。eラーニングシステムの活用を試み、学生が主体的に学習できるような仕掛けづくりに心がけ、授業外学習を活かしながら具体的な看護の展開方法について学修した。

今年度、旧カリキュラムの精神看護学方法論が最終年度となった。演習コマであり、学生にとっては非常に手ごたえのあるボリュームであるが、核となる人間関係論やセルフケア理論を学びながら事例の看護過程の展開も行う。精神看護の実技も含め、実習前の集大成としてまとめる貴重な学修内容でもある。eラーニングシステムを活用しながら学生との双方向性学習を心掛けた。次年度は新カリキュラムの精神看護学方法論Ⅱへ一部を引き継いでいくこととなる。

精神看護学実習では、精神科単科病院2病院で2週間の実習を行った。それぞれが専門病院であり慢性期閉鎖病棟、スーパー救急閉鎖病棟、急性期治療病棟での実習となり、様々な疾患、病期、発達段階の対象を受け持ち、専門性の高い学修となった。

総合実習の2週間は、福祉的支援の場の精神障害者を対象とする地域事業所と医療的支援の場である精神科病院、森田療法センターの3か所で実習を行った。地域での実習は就労支援B型事業所（クラブハウス）で当事者と活動とともにし、ミーティングにも参加した。地域で暮らす精神障害者の居場所であり、活動の場であり、就労機能のある当該事業所での実習により障害を持ちながらも支援を受けながら地域で生活する精神障害者への福祉的支援について、看護職と精神保健福祉士との多職種連携を考える機会となった。森田療法センターでは、対象の特徴を理解し、森田療法における看護師の役割について理解を深めた。精神科病院の実習は、急性期閉鎖病棟で患者を受け持ち、看護過程を展開しつつ、看護師とともに看護業務のシャドーイングを実施した。

#### II. 研究

精神看護学での研究活動を以下に示す。

1. 知的障害を伴わない青年・成人期自閉症スペクトラム（ASD）支援者の困難感の分析－精神科デイケア等141施設の調査結果－（小谷野康子、順天堂精神医学研究所助成金）

本研究は、精神科デイケア等において知的障害を伴わない青年・成人期ASD者を支援している医療的支援スタッフの困難感について明らかにすること本研究の目的とした。WAM NETで公開されている精神科デイケア等のスタッフを対象に、自記式質問紙調査を実施した。質問紙の回収率は、1,037部中148部（14.3%）であった。有効回答の141を分析の対象とした。対象の平均経験年数は12年6ヶ月、44%が精神保健福祉士で、看護師は29.8%であった。調査の結果、専門的研修に参加した経験のある者は67.4%と高く、支援スタッフの92.2%には相談できる支援者がいたが、92.9%の人がASDに対する支援に困難を感じていた。困難の内容は対象の行動特性（56.7%）、当事者メンバー間の調整（27%）、支援展開（31.9%）、家族・職場の対応（17.7%）であった。困難感の自由記載についての分析の結果では、支援者のASD支援困難感について、102のコードから「支援者側の知識不足」、「対象の行動特性」、「課題解決に向けての困難感」、「他のメンバーとの調整」、

「就労環境の調整」, 「家族の調整」, 「支援展開」の7のカテゴリーと, 25のサブカテゴリーが抽出された。

2. 精神障がい者の地域生活におけるセルフマネジメント評価尺度の開発 (山下真裕子, 科学研究費補助金・基盤研究 (C), 2018年度)

精神障がい者が地域生活を送る上で必要なセルフマネジメント行動を抽出し, それを基に60項目の尺度を作成した。精神科病院に入院する患者191名を対象に, 質問紙調査を実施し, 現在尺度の信頼性, 妥当性を検討中である。

3. 精神科救急医療における民間救急と入院受け入れ病院の連携に関する研究－民間救急における患者移送についての聞き取り調査－ (石川純子, 看護学科研究費助成, 2018年度)

東京都における患者移送の実態調査を行っている。現在, 引き続きデータ収集中である。

## 「点検・評価」

### 1. 教育

精神看護学の授業はディプロマポリシーの「倫理的姿勢」や「課題解決能力」, 「メンバーシップ・リーダーシップ」を涵養する科目である。授業開始の冒頭でそれらを保障する科目であることを学生に意識づけるとともに, これらの達成を強化する授業内容にする必要がある。レポートの重みづけの検討や自身で問題を発見できるような課題設定を検討したい。

また, 学生が主体的に学べるための動機づけを強化する必要がある。e-ポートフォリオ, e-ラーニングといった既存のシステムを活用しながら今後も検討していく。

### 2. 研究

外部資金の獲得, 学科内研究費の獲得により研究が進行中である。研究は分析中のものもあるが, 論文として誌上発表できるように準備をしていきたい。また, 精神科医療に関連した施設における共同研究も継続的に行い, 大学と臨床との連携, 多職種連携による地域貢献などにも引き続き注力していきたい。

## 研究業績

### I. 原著論文

1) Koyano Y, Watanabe H. Analysis of the difficulties experienced by service providers supporting adolescents and adults having autistic spectrum disorder without intellectual disabilities—survey results from

141 psychiatry day-treatment institut. 順天堂精神医学研究所紀要 2018; 29: 55-8.

2) 山下真裕子, 藪田 歩, 伊関敏男. 地域定着支援を実施する支援者の認識する精神障がい者が地域で暮らすために必要な要素. 日精保健看会誌 2018; 27(1): 82-90.

3) Yamashita M. Theory of self-care for people with mental disability in a community. Journal of Practical and Professional Nursing 2018; 2(1): 003.

### III. 学会発表

1) Koyano Y, Watanabe H. Difficulties associated with the support for autism spectrum disorders (ASD) in adolescence and adulthood in psychiatry day-treatment institutions for persons with psychiatric disabilities—the results of 141 psychiatry day-treatment institutions-. IEPA 11th International Conference on Early Intervention in Mental Health. Boston, Oct. [Early Interv Psychiatry 2018; 12(S1): 169]

2) Koyano H, Koyano Y, Prevalence and trend in alcohol use disorders in Japanese diabetic patients. STTI (Sigma Theta Tau International) 29th International Nursing Research Congress. Melbourne, July. [Sigma Theta Tau International Nursing Research Congress 2018; 7]

3) 小谷野康子. 弁証法的行動療法スキルトレーニングによる感情変容－介入1年半の事例分析. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月. [日看科学会講集 2018; 38回: 257]

4) 山下真裕子. 地域で暮らす精神障がい者が認識する地域生活に必要な要素. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月. [日看科学会講集 2018; 38回: 256]

5) 久保善子, 佐竹澄子, 高橋 衣, 梶井文子, 石川純子, 望月留加, 嶋澤順子, 北 素子. 看護系大学生の主体的学修行動の検討. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月. [日看教会講集 2018; 28回: 134]

6) 石川純子, 横溝 愛<sup>1)</sup>, 塩月玲奈 (中山病院), 西山晃好<sup>1)</sup> (吉祥寺病院). 精神科救急医療における患者移送に関する研究－東京都における民間救急の実態調査(第1報)－. 第26回日本精神科救急学会学術総会. 那覇, 11月. [日精救急会抄集 2018; 26回: 107]

## 小児看護学

教授：高橋 衣 小児看護学  
講師：永吉美智枝 小児看護学

### 教育・研究概要

学部教育では、概論および方法論・演習を学内講義とし、小児病棟・小児外来・総合母子健康医療センター・NICU・GCU・通園（所）支援施設実習で小児看護実践能力を習得し教育評価を行った。特に、日常的な臨床場面での子どもの権利擁護の実践を高めるための教育方法・学生が主体的に技術演習に取り組むための教育方法を検討した。4年生総合実習（小児臨床看護コース）では、Family-centered care コースと小児地域連携コースを設定し、地域連携と多職種連携における看護師の役割を習得した。

研究では、子どもの権利擁護に関する研究、小児がん経験者の長期フォローアップに関する研究、発達障害児に関する研究に取り組んでいる。

### I. 子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践尺度の開発

本研究は、子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証する。先行研究を基に尺度案を抽出し、小児看護教育、小児看護に携わる教員・看護師を対象に、尺度項目およびスケールの内容妥当性を検討し31項目の尺度案を作成した。さらに尺度案を関東圏内の小児専門病院5施設および関東圏内大学

病院25施設計30施設の627名に無記名自記式質問紙調査票で調査を実施した。有効回収率は58.2%であった。項目分析、因子分析の結果、「子どもと家族を理解し支援する力」、「子どもの権利を擁護していない医療スタッフと調整する力」、「子どもへの説明と意思を変更確認する力」の3因子19項目が抽出された。Cronbach's  $\alpha$ 係数は0.86と、ある程度の内容妥当性が示された。調査対象を変更拡大し尺度項目・基準関連妥当性の検討課題があるが、精度を高める事で、妥当性と信頼性を確保し実用性のある尺度となる可能性が確認できた。

### II. 小児がんをもつ乳幼児の心理社会的発達の危機と親子の関係性

小児がんの治療開始後、患児が様々な状況的危機に直面しながら発達課題に取り組み、乗り越えることは容易ではない。近年、治療後の身体的晩期合併症、

成長発達過程における心理社会的晩期合併症が報告されている。網膜芽細胞腫（RB）をもつ乳幼児の発達特性と母子相互作用に関する調査の結果、患児（ $n=13$ ）の発達指数（DQ）は2歳時に低下し、特に両眼性腫瘍の患児のDQは2歳時に発達障害の境界域へ低下した。また、DQが低いほど問題行動が出現した。1歳時から発達の遅れ（ $DQ<70$ ）を示した視覚障害のある患児（ $n=5$ ）は、笑顔がなく母親の顔や目を見ないなどの行動の特徴がみられ、母子相互作用が障害されていた。長期フォローアップにおいて、多職種が発達と育児の視点を持ち、治療中から良好な母子の関係性を促進し、その後の発達の基盤をつくることは重要である。

### III. 小児がん経験者の復学後における生活上の困難と対処

本研究の目的は、入院治療を終了した小児がん経験者の退院後の成長過程に経験する困難と対処およびサポートの実態を明らかにすることとした。小児がん経験者9名を対象に、1時間程度の半構造化面接を行い、質的記述的分析を行った。小児がん経験者の退院後の成長過程に経験した困難は、「化学療法後の体力低下による長期間の授業の欠席」、「治療後の体力低下や運動機能障害による学校生活上の制限」、「体力低下による仲間との集団行動の難しさ」、「年度途中から新しい仲間に入る難しさ」、「自己の身体と友達とのコミュニケーションに対する自信喪失」、「同年齢の友達とのコミュニケーションに対する違和感」、「病気に対する担任や友達の気遣いに対する抵抗感」、「入院前と復学後の自己の違いの自覚と意欲の低下」、「学習空白による学力の低下と学習の遅れを取り戻す困難さ」、「入院による長期欠席に伴う進学上の不利」、「治療後の晩期障害による普通校への通学継続の困難」、「成人期まで持続する慢性的な体調不良による気分の落ち込み」、「仕事により身体にかかる負担と制限に対するもどかしさ」が抽出され、学校生活や仕事に関連していた。対処は9カテゴリーが抽出された。

### IV. A prospective study of relationships between developmental characteristics of four-to five-year-old infants after retinoblastoma treatment and parenting stress

本研究の目的は、RBの治療を終え、4歳から5歳時期の幼児について、1. 母親が認識する幼児の行動特性、2. 母親の育児ストレスの実態を探索することとした。経過観察中の幼児の母親20名を対

象に、1. 日本版 Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ), 2. 日本版 Parenting Stress Index (PSI) を用い、6ヶ月間隔で2回の前向き調査を実施した。横断および縦断分析にはSPSS23 (IBM) を使用した。

Time 1 の幼児の月齢の中央値は49.0 (48-65) ヶ月で、発達検査によるDQは100 (93-100)であった。診断時の月齢は10.5 (0-38) ヶ月、治療期間は9.5 (2.5-48) ヶ月であった。PSIとSDQの2時点の得点に有意差はみられなかった。PSI下位尺度では、“Mood”がハイリスクを示す確率が高く、Time 2にSDQの“Conduct problems Scale”との有意な正の相関がみられた ( $\rho = .84, p < .001$ )。また、“More problems/worries”が2時点ともに標準得点より有意に高く ( $p < .05$ )、SDQの“Prosocial scale”は、Time 1に6名 (30.0%)、Time 2に4名 (20%) がhigh needを示し、Time 2に“More problems/worries”と有意な負の相関を示した ( $\rho = .59, p < .01$ )。“Total difficulties score”は、“Child Domain Total” ( $\rho = .81, p < .001$ )、“Role restriction” ( $\rho = .62, p < .01$ )、“Depression” ( $\rho = .69, p < .01$ )との相関がみられた。

#### V. 知的障害が軽度な発達障害児の入院中の関わりに対する看護師の認識とその関連要因

知的障害がないあるいは軽度な、発達障害児の入院中の関わりに対する、看護師の認識、およびその認識との関連要因について、以前学会発表した内容にさらに分析を重ねた。その結果、発達障害児との関わりはやや困難であり、あまり自信が無いと感じていた。発達障害児との関わりの困難感には「発達障害児の年齢」、「発達障害児と関わった人数」、「親の面会状況」が関連していた。これらは2019年に日本育療学会誌に掲載予定である。

#### 「点検・評価」

教育では、新カリキュラムにおいて子どもの権利擁護・成長発達・健康増進、Family centered careの中心概念であるパートナーシップを重視した4年間の系統的な教育方法および内容を検討する。また、看護研究では、学生が研究的な思考で子どもの現状を考察する方法、技術の習得と臨床へ還元する視点をもてる教育を行う。

研究では、それぞれの教員が取り組んでいる研究において明らかになった課題を基に、継続的に追及していく。また、附属病院との共同研究を推進していく。さらに、外部研究資金の獲得および研究に取

り組み、学部教育・現任教育・小児看護への還元を目指す。

## 研究業績

### II. 総説

- 1) 永吉美智枝. 【小児・周産期の看護と乳幼児精神保健-多職種連携による育児支援-】小児がんをもつ乳幼児の心理社会的発達の危機と親子の関係性 網膜芽細胞腫を発症した乳幼児の発達特性と母親への支援. 乳幼児・心理研 2018; 27(2): 139-47.

### III. 学会発表

- 1) 高橋 衣, 瀧田浩平. 子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践尺度の開発-信頼性と妥当性の検証-. 日本小児看護学会第28回学術集会. 名古屋, 8月.
- 2) 久保善子, 佐竹澄子, 高橋 衣, 梶井文子, 石川純子, 望月留加, 嶋澤順子, 北 素子. 看護系大学生の主體的学修行動の検討. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月.
- 3) Nagayoshi M, Saito Y, Adachi K, Takahashi Y, Tanigawa K. Difficulties and coping actions of childhood cancer survivors in their life after returning to their school. The 50th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP 2018). Kyoto, Nov.
- 4) Nagayoshi M, Hirose Y. A prospective study of relationships between developmental characteristics of four- to five-year- old infants after retinoblastoma treatment and parenting stress. The 50th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP 2018). Kyoto, Nov.
- 5) 永吉美智枝, 齊藤淑子, 足立カヨ子, 高橋陽子, 谷川弘治. 小児がんをもつ患児への病院内教育における教員の関わり 小児がんの長期入院治療における教育の専門性. 日本特殊教育学会第56回大会. 大阪, 9月.
- 6) Sugiuchi M, Nagayoshi M, Takahashi K. Roles of fathers of 0-3-year-olds in double-income households, and related factors. 16th WAIMH (World Association for Infant Mental Health) World Congress. Rome, May.

### V. その他

- 1) 永吉美智枝. 「病気の子ども・家族を支えるために~小児医療の現場から~」小児医療の現状と病弱教育へのニーズ. 病気の子ども医療教 2018; 24: 73-7.



## 母性看護学

教授：細坂 泰子 育児支援, 母乳育児, 周産期ケア

講師：濱田真由美 授乳支援, 社会規範, 経験

### 教育・研究概要

母性看護学領域では、「母性看護学概論」, 「周産期看護方法論Ⅰ・Ⅱ」の講義・演習科目を経て, 看護実践能力と課題解決能力を習得するプロセスを重視した教育を実践した。研究においては, 女性のライフスタイル各期における様々な健康問題について研究し, 研究員各自の専門性に依拠したテーマでの探索を行った。

### I. 学部教育

母性看護学における学部教育は2017年度の新カリキュラム改訂に伴い, 「母性看護学概論」の授業内容変更と看護対象論内でのライフサイクルからみた母性看護学の教授法が新たに加わった。4年間を通してDP2の課題解決能力の育成に焦点をあて, 同時にDP3のパートナーシップやDP5の倫理的姿勢の修得を図った。

「母性看護学概論」では, 性と生殖に関する基本的な知識に加え, 母性看護を実践する上での多様な思考力を養うことを科目のねらいとした。科目は講義, 討議およびディベートで教授した。「周産期看護方法論Ⅰ」では, 妊娠・分娩期における対象の身体的・心理的・社会的変化と生活への適応やその看護ケアの学習を科目のねらいとした。科目は講義, 演習, 個人ワークで教授した。「周産期看護方法論Ⅱ」では, 産褥期における対象の身体的・心理的・社会的変化と生活への適応および新生児期の生理的特徴について学び, 母子を中心とした家族への援助を学ぶことを科目のねらいとした。科目は講義, 演習, 個人・グループワークで教授した。また2年次必修の演習科目として行われる「家族看護論」では, 家族看護学に必要な様々な理論や技法を学ぶことで, 健康な家族のあり方について学ぶことを科目のねらいとした。これらの授業を経た上で, 臨地実習での実践を行った。

「母性看護学実習」では, 妊娠・分娩・産褥期および新生児期を中心とした母性看護学の対象者とその家族に対し, 看護過程を展開するための基礎的実践能力を養うことをねらいとした。産科外来での妊婦健診やハイリスク新生児室での見学実習, 産婦・

褥婦とその新生児を受け持つウェルネス看護過程を展開する病棟実習を通して, 母性看護学に必要な看護支援について教授した。また総合実習では特に将来, 助産師養成課程に進学する意志のある学生を対象に, 「母性看護学実習」で学ぶ内容にハイリスクの対象者や分娩時の看護ケアを追加して教授した。

### II. 研究

当該年度に領域内で取り組んだ主な研究活動は以下の5つである。

#### 1. 乳幼児をもつ父親の育児と虐待の様相

父親を対象に育児不安や虐待不安の具体的な内容を語りの中から探索的に検討した。11名の研究参加者のインタビューから497のコードを抽出し, 5つのカテゴリーに分類した。父親は育児の中でしつけと虐待の境界が狭く, しつけが虐待に結びつきやすいことが明らかになった。「漠然とした育児に対する畏怖」, 「父親の育児への関わりにくさ」, 「虐待が入り込む育児の隙間」に介入を行い, しつけから虐待への移行を阻害する必要性が示唆された。

#### 2. 日本語版 Quality Assessment Tool for Quantitative Studies (J-QATQS) の等価性を担保した作成および信頼性の検討

本研究は量的研究を研究の質の観点から総合的に評価する尺度「Quality Assessment Tool」の日本語版 (J-QATQS) を作成し, そのプロセスを明らかにしたものである。尺度翻訳にはバックトランスレーション法を用いた。J-QATQS は利便性を鑑みチャート形式で作成した。作成したJ-QATQSを和文の看護研究21本を用いて評価し, 検者間信頼性を算出し, いずれも高い信頼性が得られた。

#### 3. NICU (Neonatal Intensive Care Unit) に入院した早産児の退院時栄養方法に影響する要因：完全母乳栄養群と混合栄養群の比較

本研究では, NICUに入院した早産児の退院時栄養方法における関連要因を明らかにし, その影響力の強さを検討することを目的とした。無記名自記式質問紙調査による関係探索的研究であり, 全国11施設の総合周産期センターで264部を回収し分析した。多変量解析を行い, 1) 退院時母乳分泌量が1日500mL以上 (OR=32.07, 95%CI=7.59-135.41,  $p<0.001$ ), 2) 夫に母乳相談をした (OR=9.23, 95%CI=1.99-43.16,  $p=0.01$ ), 3) 妊娠中に母乳栄養を希望 (OR=5.18, 95%CI=1.08-24.76,  $p=0.04$ ), 4) 直接授乳後に追加授乳をしない (OR=4.78, 95%CI=1.18-19.41,  $p=0.03$ ) の4要素が完全母乳栄養に寄与する要因であることが明らかに

なった。

4. 夫立ち会い分娩における夫への支援に対する助産師の認識：夫への関わりの困難感に焦点を当てて

夫立ち会い分娩における夫への支援に対する助産師の認識について、夫への関わりの困難感について明らかにした。5名の研究参加者のインタビューから、夫立ち会い分娩における夫への支援に対する助産師の認識は、「分娩体験を共有し妻のことを理解しようとする姿勢を夫に期待する」、「夫婦の分娩への満足感を高めるために助産師としての責務を果たす」、「産後を見据え夫婦に継続的に関わる」、「夫立ち会い分娩の経験が夫の成長につながる」の4つのカテゴリーが抽出された。夫立ち会い分娩における夫への関わりの困難感は、「夫支援の煩わしさ」、「理想像に反する夫への関わりの破綻」、「夫への継続支援の限界」、「医師と助産師の夫立ち会い分娩の意味づけの違い」、「助産師のマンパワー不足」の5つのカテゴリーが抽出された。

5. 授乳を行う母親の体験：質的研究のメタ・サマリー

本研究は授乳を行う母親の体験を網羅的に明らかにすることを目的とした。母乳育児に関する論文が激増した2000年以降に日本で発表された質的研究結果40件をメタ・サマリーにより統合した。授乳を行う母親の体験は、30の結果に要約され、9トピックに分類された。そのなかで、母乳育児や搾乳に伴う身体的・精神的苦痛が最も多く現れた。また、母親にとって母乳育児は母子関係よりもむしろ、母親としての価値に結びついた体験であった。

### 【点検・評価】

学部教育では授業評価において比較的高い評価を得られていた。今後、学生と教員との双方向性の授業となるよう教授方法を検討していく必要がある。

研究活動については、各研究員が異なるテーマを選択することで母性看護領域の中で幅のある研究活動を実践できた。また各研究員が競争的資金を保有もしくは申請することができた。今後は研究の実践だけでなく、研究の公表にむけて研究を遂行していく課題がある。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) 細坂泰子, 茅江江子 (秀明大). 育児支援における4コママンガの活用 しつけと虐待の境界に焦点を当てて. 母性衛生 2019; 59(4): 896-905.

- 2) 濱田真由美, 佐々木美喜 (城西国際大), 住谷ゆかり<sup>1)</sup>, 鈴木健太<sup>1)</sup>, 仁昌寺貴子<sup>1)</sup> (<sup>1)</sup> 日本赤十字看護大). 授乳を行う母親の体験 質的研究のメタ・サマリー. 日看研会誌 2018; 41(5): 875-89.

### III. 学会発表

- 1) Hososaka Y, Kayashima K (Shumei Univ). (Poster) Utilization of four-frame comic manga in childcare support in Japan: focusing on the boundary between discipline and abuse. 16th WAIMH (World Association for Infant Mental Health) World Congress. Rome, May.
- 2) Kashiwazaki M, Hososaka Y. (Poster) A literature review of factors related to breastfeeding in Japan. 16th WAIMH (World Association for Infant Mental Health) World Congress. Rome, May.
- 3) 佐藤さとみ, 細坂泰子. (口頭) 特定保健指導の積極的支援対象者が初めての積極的支援を終了した過程～健康認識と行動の変容に焦点をあてて～. 第59回日本人間ドック学会学術大会. 新潟, 8月.
- 4) 嶋澤順子, 梶井文子, 細坂泰子, 田中幸子, 内田 満, 北 素子. (交流セッション 21) 東京慈恵会医科大学医学部看護学科におけるディプロマ・ポリシーを真に達成する教育改革への挑戦. 日本看護学教育学会第28回学術集会. 横浜, 8月.
- 5) 一木ひとみ (富士通), 細坂泰子, 櫻井尚子. (ポスター) 20年以上仕事を継続してきた女性労働者の働き続ける力に関する研究. 第28回日本産業衛生学会全国協議会. 東京, 9月.
- 6) 細坂泰子, 柏崎真由. (ポスター) 日本語版 Quality Assessment Tool for Quantitative Studies (J-QAT) の作成および検者間信頼性の検討. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月. [日看科学会講集 2018; 38回: 553]
- 7) Hamada M. (Poster) Literature review regarding antenatal breastfeeding education designed to alleviate difficulties in breastfeeding. 16th WAIMH (World Association for Infant Mental Health) World Congress. Rome, May.
- 8) 高田早苗<sup>1)</sup>, 川原由佳里<sup>1)</sup> (<sup>1)</sup> 日本赤十字看護大), 小坂橋喜久代 (京都橘大), 大森純子 (東北大), 佐藤和佳子 (山形大), 吉田澄恵 (千葉大), 濱田真由美. (交流集会 13) 看護学術用語の検討 Part 2-2011年版の改訂に向けて. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月. [日看科学会講集 2018; 38回: 402]
- 9) 濱田真由美. (ポスター) 医療系論文における母乳育児関連研究の動向と学際的特徴. 第38回日本看護科学学会学術集会. 松山, 12月. [日看科学会講集 2018; 38回: 632] 地域看護学

## 地域看護学

教授：嶋澤 順子 地域看護学  
 講師：久保 善子 地域看護学  
 講師：清水由美子 地域看護学

### 教育・研究概要

教育に関しては2012年度入学生から保健師教育が選択制となり、実習体系も大きく変化したため、実習地との連携を強化して実習指導にあたっている。また、効果的な実習につなげる準備教育として、3年次の公衆衛生看護活動論においては近隣自治会の協力を得て、地域のキーパーソンへのインタビューや高齢者宅への家庭訪問、地区診断を演習に組み込んだ。

地域看護学では、教員が各々に3つの研究テーマについて取り組んでいる。1つ目は、独立型訪問看護ステーション看護師による在宅精神障害者地域生活支援モデル開発に関する研究の継続研究として実施している独立型訪問看護ステーションによる退院直後集中支援に焦点をあてた支援モデル開発に関する研究である。在宅精神障害者の地域生活移行支援において重視される退院直後の集中ケアにおける訪問看護の機能を明らかにすることを目指し、国内外の研究動向の整理を行い、公表した。次いで、多様な地域にある独立型訪問看護ステーションでの調査を進めている。2つ目は、ストレスチェック制度における産業看護職のコンピテンシーに着目し、質的に研究を進めている。また、産業看護職のキャリアアンカーや仕事・家庭の満足度に焦点を当てた調査を実施し、分析を行った。3つ目は、地域で生活している血液透析患者の保健・福祉に関する研究である。また、近隣地区の住民が関係者と協働しながら互助の仕組みづくりを目指すプロセスの解明に向けてアクションリサーチを開始し、この一環として避難行動要支援者の実態調査を実施した。

さらに、第三病院との共同研究では、血液浄化部と外来維持透析患者の自己管理支援をテーマとして調査を実施し、分析結果を学内の研究会で報告した。

### 「点検・評価」

教育に関しては、保健師教育課程の選択学生が受講する公衆衛生看護学関連の科目・実習内容の検討を進めてきたのに対し、実習指導者からも一定の評価を得ているが、今後、教育評価研究につなげていきたいと考える。

各研究については、整理した調査データを調査対象者にフィードバックし、さらに各学会でその成果を発表した。今後も、外部研究資金の活用および応募を積極的に行い、研究継続を推進する予定である。また、第三病院との共同研究については、その調査結果を学内の研究会で報告した。

### 研究業績

#### I. 原著論文

- 1) Kubo Y, Hatono Y (Kyushu Univ), Kubo T (Natl Inst Occupational Safety Health), Shimamoto S (Tokai Univ), Nakatani J (Univ Occupational Environmental Health). Relationship between job and home life satisfaction and demographic characteristics among occupational health nurses in Japan. 日職災医会誌 2018; 66(4): 289-97.
- 2) Sugisawa H (J.F. Oberlin Univ), Shimizu Y, Kumagai T (Osaka City Univ), Sugisaki H (Hachioji Azumacho Clin), Ohira S (Sapporo Kita Clin), Shinoda T (Tsukuba Int Univ). Barriers to effective case management for disabled patients on hemodialysis. Ther Apher Dial 2018; 22(2): 133-41.
- 3) 久保善子, 鳩野洋子 (九州大), 久保智英 (労働安全衛生総合研究所), 島本さと子 (東海大), 中谷淳子 (産業医科大). 産業看護職のキャリアアンカーに影響する要因の検討. 日職災医会誌 2018; 66(6): 476-85.

#### III. 学会発表

- 1) 久保善子, 鳩野洋子 (九州大), 久保智英 (労働安全衛生総合研究所), 島本さと子 (東海大), 中谷淳子 (産業医科大). どのような働き方が産業看護職の仕事の満足度の向上に結びつくのか? : 属性による検討. 第91回日本産業衛生学会. 熊本, 5月.
- 2) Shimasawa J, Osawa M (Gunma Prefectural Coll Health Sci), Ueno M (Shonan Med Coll), Shimizu Y, Kubo Y. Post-discharge support for persons with mental illness: a nursing research review. 4th International Conference on Public Health (ICOPH 2018). Bangkok, July.
- 3) 久保善子, 梶井文子, 高橋 衣, 望月留加, 佐竹澄子, 石川純子, 嶋澤順子, 北 素子. 看護系大学生の主体的学修行動の検討. 日本看護学教育会第28回学術集会. 横浜, 8月.
- 4) 大澤真奈美, 斎藤 基, 飯田苗恵, 鈴木美雪, 塩ノ谷朱美, 坪井りえ (群馬県民健康科学大), 嶋澤順子. 精神科訪問看護師の離職意向と職務満足感との関連. 日本地域看護学会第21回学術集会. 岐阜, 8月.



- 5) 清水由美子, 杉原陽子(首都大学東京), 杉澤秀博(桜美林大), 小池友佳子(神奈川県立保健福祉大). 都市部在住独居高齢者の健康に関する不安に関連する要因非独居高齢者との比較. 第77回日本公衆衛生学会総会. 郡山, 10月. [日公衛会抄集 2018; 77回: 418]
- 6) 杉原陽子(首都大学東京), 杉澤秀博(桜美林大), 清水由美子, 小池友佳子(神奈川県立保健福祉大). 地域在住高齢者の低栄養リスクに関連する心理社会的要因 属性別にみた要因の差異. 第77回日本公衆衛生学会総会. 郡山, 10月. [日公衛会抄集 2018; 77回: 556]
- 7) 小池友佳子(神奈川県立保健福祉大), 杉原陽子(首都大学東京), 杉澤秀博(桜美林大), 清水由美子. 要支援認定者の介護保険サービス利用パターンと身体活動の関連. 第77回日本公衆衛生学会総会. 郡山, 10月. [日公衛会抄集 2018; 77回: 430]

#### IV. 著 書

- 1) 嶋澤順子. 第2章: 地区活動の展開過程 V. 事例解説編. 牛尾裕子(兵庫県立大), 佐藤紀子(千葉県立保健医療大), 田村須賀子(富山大) 編. ワークブック 地域/公衆衛生看護活動事例演習. 東京: クオリティケア, 2019. p.70-9.

## 在宅看護学

教授: 北 素子 在宅看護学  
 講師: 遠山 寛子 在宅看護学  
 講師: 杉山 友理 在宅看護学

### 教育・研究概要

在宅看護学では学部教育として, 2011年度より, 在宅看護学概論から演習型授業での在宅看護援助論, 在宅看護学実習という一連の学習過程において, 在宅看護の特徴を踏まえた看護過程の展開能力修得に重点をおいている。継続的に教育評価研究を実施するとともに, 各教員の関心テーマに沿った研究を進めている。

#### I. 在宅看護学実習における学生の患者情報の管理の認識と行動

昨今インターネットやSNSの普及により, 不特定多数の情報の収集, 発信が容易にできる環境となっており, 学生が情報管理の認識を高め, 適切な情報管理を行うことができるよう教育的に関わる重要性が高まっている。学生が在宅看護学実習において情報管理の認識を高め, 安全な情報管理を行うこ

とが出来よう教育的関わりの示唆を得ることを目的として研究に取り組んでいる。今後は学生の患者情報に対する認識と管理の実際について調査を行っていく予定である。

#### II. 急性期病院における認知症高齢者ケースの退院支援プロセス構築の研究

近年, 認知症を有する高齢者が他の疾患の治療を目的として急性期病院に入院する機会が増えているが, その退院支援は困難ケースに挙げられる。認知症特有の困難性に対応した退院支援モデルを開発するため, 急性期病院の退院支援部門の看護師が関わる認知症高齢者の退院支援プロセスを明らかにすることを目的として, 複数ケーススタディ法を用いた研究に取り組んでいる。

#### III. 予期せぬ再入院

日本では増加し続ける医療費の中で, 入院治療費を削減するためには, 患者・家族に対して適切な退院支援を行い, 再入院をせず, 地域で安全に安心して療養生活を継続する必要がある。そこで, 再入院予防のための退院支援に関する国内外の文献レビューを通して, これまでの研究動向を見極め, 具体的な退院支援の内容・効果と今後の課題を明らかにするとともに, 急性期病院における現状を明らかにしていく予定である。

#### IV. 複数の訪問看護事業所を利用する小児の訪問看護事業連携モデル開発

在宅で生活する医療的ケアを必要とする小児は増加しており, 合わせて小児の訪問看護の需要も増えている。しかしながら小児を対象とした訪問看護を実施できる事業所と看護師は限られている現状にある。訪問看護事業所は小規模が多いことから, 小規模訪問看護事業所が連携し合うことにより在宅で療養する小児やその家族に対する支援体制強化が可能となると考える。そこで, 複数の訪問看護事業所を利用する小児の訪問看護事業所モデル開発を行う研究に取り組んでいる。

#### 「点検・評価」

在宅看護学では, 積極的にアクティブラーニングを取り入れるとともに, ICTを活用した教育に取り組んでいる。継続的に教育評価を行い, その効果を確認しながら授業改善に取り組んでいく必要がある。また, 2017年度新カリキュラムが始まったことから, これまでの教育効果を検証しておくことが



重要である。その検証に取り組むことを進めていく。各教員が取り組んでいる研究は、いずれも在宅看護学領域では重要なテーマであり、領域内でサポートしあい、さらに発展的に取り組んでいくとともに、研究成果を論文化し、広く公表していくことが課題である。

## 研究業績

### Ⅲ. 学会発表

- 1) 杉山友理, 北 素子, 遠山寛子, 石橋史子. (ポスター) 看護学実習における患者情報の取り扱いに関する文献検討. 第38回日本看護科学学会学術集会, 松山, 12月. [日看科学会講集 2018 ; 38回 : 551]
- 2) 遠山寛子, 杉山友理, 北 素子, 石橋史子. (ポスター) 予期せぬ再入院に対する退院支援に関する国内外の研究動向と具体的な支援内容と効果. 第38回日本看護科学学会学術集会, 松山, 12月. [日看科学会講集 2018 ; 38回 : 327-8]
- 3) 加瀬美郷 (東千葉メディカルセンター), 北 素子. (口頭) ICUで身体拘束を受けた患者の体験. 第38回日本看護科学学会学術集会, 松山, 12月. [日看科学会講集 2018 ; 38回 : 172]
- 4) 川戸ゆかり, 北 素子. (口頭) インスリン療法を必要とする壮年期有職2型糖尿病男性患者が安定した血糖コントロールの維持に至る過程. 第38回日本看護科学学会学術集会, 松山, 12月. [日看科学会講集 2018 ; 38回 : 95-6]
- 5) 朝倉真奈美, 赤間美穂, 内木場あゆみ, 北 素子, 品川俊一郎, 中島 朋, 矢野勝治, 泉 祐介, 八代直子, 遠山寛子, 杉山友理. (口頭) 急性期病院における認知症高齢者の手術決定時から退院後1ヵ月のプロセス 予定入院で手術を受ける患者への認知症ケアチーム介入の効果. 第19回日本認知症ケア学会大会, 新潟, 6月. [日認知症ケア会誌 2018 ; 17(1) : 290]

### Ⅳ. 著 書

- 1) 北 素子. 第4章: 高齢者と家族への看護: 家族形態と社会問題. 奥野茂代 (長野看護大), 大西和子 (鈴鹿医療科学大, 三重大) 監修, 百瀬由美子 (愛知県立大) 編. 老年看護学: 概論と看護の実践. 第6版. 東京: ヌーヴェルヒロカワ, 2018. p.94-112.